

横浜

Yokohama Renaissance

# ルネサンス

Number 12

特集

## ハマの Art Messenger

横浜の定番

### 鰻の「わかな」

Who's Who in YOKOHAMA

### 野坂欽也 さん

### Junko さん



濱 いいこと、  
いいもの、  
いっぱい。

Yokohama

横浜信用金庫

横浜信用金庫

## ごあいさつ

横浜信用金庫理事長  
齋藤 寿臣

『横浜ルネサンス』第12号をお届けします。『横浜ルネサンス』は、当金庫の創立80周年記念事業の一環として、2002年10月に創刊しました。当初は年1回の発行でしたが、2006年から春と秋の年2回発行としています。

本号では、特集「ハマのArt Messenger」と題して、横浜でアートな活動を展開する方々取材しました。アーティストの日比野克彦さん、女優の五大路子さんを始め、アートギャラリー、映画、イラストなどに関わる方を取材して、アートをテーマに横浜を多面的にとらえることを試みました。

6回目となる「横浜の定番」では、創業1872年(明治5)という老舗、鯉の「わかな」さんにご登場いただきました。この連載は、過去2号で崎陽軒さんのシウマイ、勝烈庵さんのカツレツを取り上げており、老舗のおいしい企画が続いています。

Who's Who in YOKOHAMAは、特集との連携を意識して、レトロでポップな空間を提供するナイトスポット&レストランを経営される野坂欽也さんと、当金庫のテレビCFに出演していただいたポップバンドCapockのボーカリスト・Junkoさんにご登場いただきました。

第5回となる「横浜の聴き方」では、横浜のご当地ソングの代表的存在である「ブルー・ライト・ヨコハマ」を取り上げて、その「強み」について考察しました。

『横浜ルネサンス』第12号、お楽しみいただければ幸いです。

表紙撮影：矢部志保

## A Table of Contents

横浜絵解き図絵／輸入食品の違反事例 ..... 2  
目次／理事長挨拶 ..... 3

### 特集 ハマのArt Messenger

 **日比野克彦** アーティスト ..... 4  
新潟で芽生えたアサガオの種が、横浜で船に化し、いざ出航へ

 **五大路子** 女優 ..... 6  
ふるさと横浜に徹底的にこだわり、横浜発の夢の舞台を作りたい

 **石井宏枝** ギャラリー・オーナー ..... 8  
若い意欲的なアーティストを世界に紹介するギャラリーを目指して

 **梶原俊幸** 映画館支配人 ..... 10  
黄金町から発信する、市民参加の映画館を作りたい

 **山口なこ** イラストレーター ..... 12  
グッズやアニメを通して、キャラクターで横浜から全国発信

横浜を詠む **水原紫苑** 写真：矢部志保 ..... 14  
横浜の定番 **割烹蒲焼わかな** ..... 16

### Who's Who in YOKOHAMA

 **野坂欽也** クリフサイド代表取締役 ..... 18  
ハマの大人の社交場をみんなで受け継いで

 **Junko** Capock ボーカリスト ..... 20  
聴く人たちにあたたかく支えられ、横浜を拠点に音楽活動を展開

横浜の聴き方 第5回 **中島久** ..... 22  
「ブルー・ライト・ヨコハマ」いしだあゆみ

横浜ジェリービーンズ倶楽部通信 ..... 23

## ◎横浜絵解き図絵

### アイスクリームの輸出

横浜は日本におけるアイスクリームの発祥地とされる。最初にそれを製造販売したのも、また、日本人として最初にそれを作ったのも横浜での出来事だったからだ。

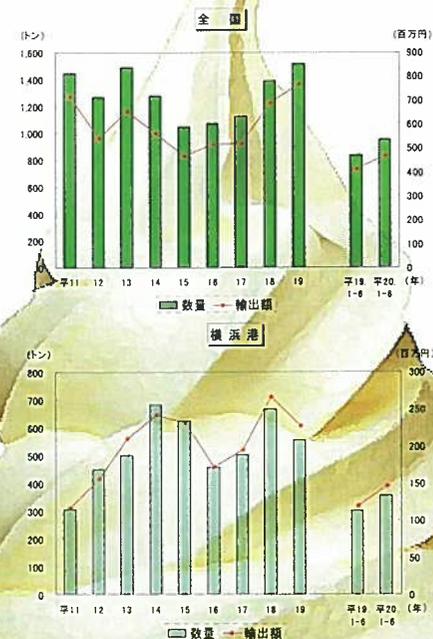
まず、1865年(慶応元年)にアメリカ人リチャード・リズレーが横浜の外国人居留地でアイスクリーム・サロンを開きその製造販売をした。当時はアイスクリームの製造に欠かせない氷を中国の天津から輸入して作ったとか。

ちなみに、アイスクリームを最初に食べた日本人は、1860年(万延元年=横浜港が開港した翌年)に日米修好通商条約批准のためアメリカへ派遣された徳川幕府一行であるとされる。当時同行した柳川当清は、その時の様子を「珍しきものあり。氷を色々に染め、物の形を作り是を出す。味は至って甘く、口の中に入るに忽ち溶けて、誠に美味なり。之をアイスクリンといふ」と、日記に記している。

日本初のアイスクリームは、1869年(明治2)6月(旧暦、新暦では7月)に町田房蔵が横浜の馬車道通りに開いた「氷水屋」で「あいすくりん」という名称で製造・販売された。原料は生乳、砂糖、卵黄といったってシンプルなもの、これはいまは「カスタードアイス」と分類されるジャンルに入る。このアイスは富士の氷穴及び函館の天然氷を用いて製造された。製法はアメリカで酪農技術を学んで明治元年帰国した出島松蔵から教わったとされる説が有力だ。一人前の値段は2分(現在の価値で約8000円)と大変高価で、なかなか浸透しなかったが、後に1899年(明治32)7月、東京銀座の資生堂主人、福原有信が売り出して世に広まった。

そんなアイスクリームだが、横浜税関資料によると、現在、日本はアメリカ、中国に次ぐ世界第3位のアイスクリーム生産国となり、世界各国へ輸出している。2007年(平成19)の輸出数量は1,513トン(対前年比8.8%増)、金額は7億67百万円(同11.6%増)とともに過去最高だった。また、2008年(平成20)上半期の輸出数量は953トン(対前年同期比14.1%増)、金額は4億67百万円(同13.7%増)で、ともに過去最高だった前年を上回る伸びで推移している。

横浜港における輸出実績は2007年(平成19)



に減少したが、2008年(平成20)上半期の輸出数量は356トン(対前年同期比18.8%増)、金額は1億46百万円(同22.5%増)となっており、伸び率は全国を上回った。

2008年(平成20)上半期において、横浜港は輸出数量で37.3%のシェアを占め港別シェアの第1位であり、これは2002年(平成14)以降連続となっている。また、2008年(平成20)上半期における輸出金額は、東京港、横浜港、神戸港の順となっている。

国別輸出シェアは、全国、横浜港ともに台湾が第1位。同国では、日本製アイスクリームの人気が高くなり、販売が好調なことから輸出シェアが高くなっている。また、シンガポール(3位)、香港(4位)およびアメリカ(2位)では日系スーパーやコンビニエンス・ストアを中心に販売されており、特にアメリカでは嗜好が近いアジア系のスーパーでも販売されていることからシェアが高くなっている。

ところで「アイスクリームの日」である5月9日日本で初めてアイスクリームを製造・販売した日と一般的に言われているが、これは社団法人日本アイスクリーム協会が1965年(昭和40)に制定したもの。横浜沿革誌にはそのような記述はない。横浜税関 調査課 調査資料より作成

# 新潟で芽生えたアサガオの種が、 やがて横浜で船に化し、いざ出航へ



ひびのかつひこ  
アーティスト、東京藝術大学美術学部先端芸術表現科教授。1958年岐阜県生まれ。学生時代にダンボールの平面作品で注目を浴びて以来、国内外で個展やグループ展の活動を行うほか、舞台美術やパブリックアートなど、多岐にわたる分野で活躍。最近では各地で一般参加者とその地域の特性を生かしたワークショップを数多く実施。83年、第30回ADC賞最高賞、99年度毎日デザイン賞グランプリなど受賞歴多数。「横浜トリエンナーレ2008」でアドバイザー・コミッティー、2009年の「横浜開港150周年記念イベント」ではプロデューサーを務める。

Photo by Yabe Shiho

## 山下埠頭に出現したダンボールの船

客船や貨物船など、ご存じのとおり横浜港には世界各地からさまざまな船が訪れる。だが先日、この港に見慣れない船が現れた。色鮮やかな外観が目を引き、しかも素材がユニーク。なんとダンボール製の船なのだ。

この船を手がけたのは、アーティストの日比野克彦さん（50歳）と横浜の市民たち。昨年10月から日比野さんは「横浜FUN.Eプロジェクト」を開始し、数多くのボランティアたちとともに船造りを進めてきた。ダンボールといえども防水加工を念入りに施し、11月末には進水イベントを実施する予定だ。

「金沢で船を造るワークショップをした時、スタッフたちと『乗りたいよね』という話になって。でも、その時は展示のみだったので、横浜で船を造る以上は『浮かべたいよね』と展開していったんです」。

山下埠頭でのワークショップは毎回盛況で、通りがかりで参加した人も多いほど。

「親子で船を造る機会なんて、なかなかないせいか、お父さんは張り切るし、子どもは色塗りに夢中になるし」。

## メディアでは伝わりきらない横浜の魅力

もともと、この船造りは「種」からじまった。2003年（平成15）、日比野さんは新潟県での展覧会「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」に参加した際、地元住民たちとアサガオを育てるプロジェクトを実施。やがてその種は、日比野さんがワークショップで出向く土地土地で育っていく。

「種が旅をして、人も動いて、いきかかって。種は、いろいろな人の思いを載せた乗り物のよう。そんなわけで『種は船』だと思っようになりました」。

今年に限っても、金沢や水戸、沖縄、種子島など、日比野さんは各地を巡ってきた。そんな日比野さんに、横浜の街はどう映るのか。

「以前は、日本の九割九分の人が思い描くような印象と同じで、中華街やマリントワーがある街といった感じでしたね」ところが、東京から月に数回は足を運び、スタッフたちと会話を重ねるうちに、横浜の印象が次第に変わる。

「横浜の人たちはこの街を『大いなる田舎』とよくいうけど、それは謙遜だと思ってた。でも、その言い方は土着性というか、150年間の街作りを支えてき

た地元住民の持つ人間くささを表している」とわかった。メディアでは伝わりきらない魅力が、横浜にはまだまだある」。

## 船で横浜のポテンシャルを発信したい

この「横浜FUN.Eプロジェクト」は来年まで続く。日比野さん自身がプロデューサーを務める「横浜開港150周年記念イベント」では、ダンボール船の出航イベントも行うという。

「これまで各地を巡ってきた種が横浜で船となり、そして今度は、日本のいろいろな地域に向けて横浜から出航する、というのがテーマ。横浜のポテンシャルを発信していきたい」。

日比野さんには、幼い頃から海に強い憧れがある。それは、海に面していない岐阜で、高校を卒業するまで暮らした影響が強いと振り返る。

「子どもの頃、近くを流れる川を見てみると、この川の先に海があって、海のまた先には、知らない国があるんだろうなあ、と思っけて。いまだに、地方に出かけて海を見ると、『ああ、遠くに来たんだ』と思うほど」。

日比野さんのそんな思いも載せたダンボール船が、横浜を発つ日が楽しみだ。



ごだいみちこ  
女優 横浜夢座座長。1952年横浜  
市生まれ。桐朋学園演劇科に学  
び、早稲田小劇場を経て新国劇に入  
団。77年、NHK朝の連続テレビ小  
説「いちばん星」でテレビドラマ主役  
デビュー。以降、数々の舞台作品や  
テレビドラマなどで活躍。96年に  
舞台「横浜ローザ」で横浜文化奨励賞、  
08年に横浜夢座の功績で第29回松  
尾芸能賞演劇優秀賞など、受賞歴多数。  
撮影協力：横浜ベイシェラトン ホテ  
ル&タワーズ 〒220-8501 横浜  
市西区北幸1-3-23 TEL:045-411-  
1111(代表) FAX:045-411-1343

# ふるさと横浜に徹底的にこだわりの夢の舞台を作りたい。

横浜にこだわる演劇活動、その背景とは

1995年(平成7)の初演以来、五  
大路子さん(56歳)は「横浜ローザ」の  
上演を続け、この舞台はもはや自他とも  
に認めるライフワークとなった。

進駐軍相手の街娼だったとされ、その  
後50年以上も横浜の盛り場に立ち続けた  
「ハマのメリーさん」をモデルにした一  
人芝居だ。

また、五大さんは99年(平成11)に劇  
団「横浜夢座」をスタートさせ、自ら座  
長を務めている。

「芝居を見たお客様が夢を抱けるように  
なる、夢の劇団を作りたかったんです」。  
五大さんは、生まれも育ちも横浜市港  
北区。だが、横浜にこだわって演劇活動  
を続ける背景には、実は大きな転機が  
あった。

30代の頃、五大さんは右足が動かなくな  
る原因不明の病を患ったのだ。舞台や  
CM、テレビドラマなどの仕事はすべて  
キャンセルを余儀なくされた。

「目の前にシャッターを下ろされた気分  
でした。本当に辛くて辛くて」。

そこで五大さんは、学生時代の恩師を  
訪問。鎌倉の接骨院で療養生活を送った。

そんなある日のこと――。

しっかり生きてる小さな花からの教え

「ちょうど、降板した舞台の初日でした。  
“私がいなくなっちゃって、ちゃんと幕が開  
くのか”と思うと、やりきれない気持ち  
になって、柱にしがみつき、大泣きして  
しまったんです。すると先生は私に松葉  
杖を渡し、裏山を歩かせた。不自由な足  
取りで歩くうち、ふと足下を見ると、小  
さな花が咲いていました。先生はその花  
の名を教えてください、こうおっしゃった  
んです。“おまえは胡蝶蘭やバラしか知ら  
んだろうが、この花を見る。こんな小さ  
な花でもしっかりと生きてる”。

およそ1年後、五大さんの右足はよう  
やく動くようになった。

「そこから私の再出発。これから先、  
私は何がしたいのかと自問自答しました。  
その時、私はどうしても芝居をやりたい  
と強く思いました。私の心を通した、私  
にしかできない芝居をやりたい、と」。

横浜にはすばらしい素材・人々の情  
熱・歴史が埋もれている。

「その宝を掘り起こし、今を生きる人  
に、明日も元気に生きていこう」と呼  
びかけてみたい。また、そんなパワー  
のある芝居を仲間と生み出したい」。

五大さんは闘病生活をきっかけに、16

歳の頃夢見ていた、横浜発の芝居への想  
いをよみがえらせたという。

「まず、私一人の単位からはじめてみよ  
う。夢の宿題を人生の答案用紙に書き込  
んでいこう。徹底的に私に、そして横浜  
にこだわっていこうと思ったのです」。

激動の時代を生き抜いた女性を演じる

そんな折り、五大さんは横浜みなと祭  
で、たまたまメリーさんをみかけた。  
「実はメリーさんについてよく知りませ  
んでした。しかしその時、彼女が私に語  
りかけたように思えたんです」。

それから五大さんは、精力的に下調べ  
を開始。多くの人にメリーさんについて  
聞き回り、本も読んだ。そして、戦中  
戦後の横浜を知る。

「調査をするうち、メリーさんの片鱗が  
わかり、私の知らない横浜に出会えたん  
です」。

そこで五大さんは、メリーさんをモデ  
ルに、激動の時代を生き抜いた女性を演  
じたいと誓う。

「メリーさんの生き様は、現代への大き  
なメッセージにもなるはず。いずれはこ  
の芝居をアメリカで上演したいですね」。  
五大さんの夢は、まだまだつきそうも  
ない。▼

Photo by Yabe Shiho



いしい ひろえ(前列中央)  
1952年横浜生まれの横浜育ち。ソニーで映像ソフトの企画・プロデュースを務める。2005年に早期退職し、フリーで映像関係の仕事が続けながら女子美術大学でメディアアートの講義を担当。その中で出会った若い才能を応援したいと、横浜市と財団法人横浜企業経営支援財団の支援を受けて、2008年3月にart gallery, on the windをオープン。www.onthewind.net 電話 045-251-0937 メール onthewind-jp@u01.gate01.com ギャラリーでは、横浜トリエンナーレ自主参加「市民が育てるヨコハマ新人作家展 九月物語」「動物物語」に続き、「花物語」(11/7~11/16)を開催する。また日本のパントマイムの種をまいたヨネヤマママコさんのアトリエ公演(12/23・12/27)も「本物に身近で出会えるのが楽しい」と注目のイベントだ。

# 若い意欲的なアーティストを世界に紹介するギャラリーを目指して

Photo by Yoko Suiho

## アートで地域を元気にする

中区福富町東通、桜色の御影石のビル  
の階段をあがってドアを開けると、正面  
にある大きな窓からやわらかな日差しが  
さしこんでいる。靴を脱いであがると、  
30平方メートルほどの小さな空間ながら、  
吹き抜けの天井と白い壁が広がりを感じ  
させる。訪ねたのは横浜トリエンナーレ  
にあわせて開催された「市民が育てるヨ  
コハマ新人作家展 九月物語」の初日。  
作品を見た後、真ん中に置かれたちゃぶ  
台に座ってお茶を飲みながら、若い作家  
たちと作品について話すのが楽しい。

art gallery, on the windを主宰す  
るのは、30年にわたって映像作品の企  
画・プロデュースをしてきた石井宏枝さ  
ん。女子美術大学の講師をする中で出  
会った学生たちを応援したい、生まれ  
育った横浜をアートで元気にしたいとい  
う思いから、2008年3月にオープン  
した。

福富町は石井さんが小さい頃住んで  
いた街。近所には子どももたくさんい  
て、商売と生活が混在する活気のある街  
だった。近所の人たちがみな通ったお風  
呂屋さん、月に一度、向かいの洋食屋  
さんに通うのも楽しみだった。大学から

東京へ出たものの、「横浜への思いは人  
一倍ある」と石井さん。1990年代パ  
ブル崩壊後、伊勢佐木町の人の流れが少  
なくなった時、何かできないかという思  
いがあった。その背景には、ニューヨー  
クのイーストビレッジにギャラリーがで  
き、若いアーティストが住むようになって、  
数年間で街が劇的に変わるのを目の  
当たりにした経験があった。

## 仕事を積み重ねて人をつなぐ

その一方で、才能とエネルギーにあふ  
れた学生たちが、卒業を前に将来への不  
安と迷いかられる様子に心を痛めた石  
井さんは、もっと早いうちから発表と出  
会いのチャンスが必要だと感じていた。  
「彼女たちの姿が、かつての自分に重  
なって見えました」という石井さん自身  
大学で映画を学んだものの、若い頃はど  
うしたら自分がやりたいことを実現でき  
るかわからず、試行錯誤の日々だった。  
学生時代からTV番組の制作に関わり、

たまたまビデオに参入しようとするソ  
ニーに職を得たが、自分が企画しない限  
り仕事はこない。そんな中で、10代の頃  
から大好きだったビデオ・アートの先駆  
者ナムジュン・パイクと出会い、それが  
転機となった。現代アートによく関

心が向き始めた時代の流れと理解ある上  
司のサポートもあって、1984年に東  
京都現代美術館でのナムジュン・パイク  
企画展を実現。その後、パイクさんのオリ  
ジナル作品「All Star Video」、「風呂敷  
天下(サテライトアート3部作)」を制  
作しソニーから発売することができた。  
「仕事を通してたくさんの方に育ててい  
ただいた。だから今度は、若い人たちが  
やりたいと思った時、その時を見極めて、  
そつと背中を押してあげたい」。

## 街の暮らしにアートの風を吹かせたい

「心に触れる作品に出会ったら、大切な  
方へのプレゼントにしたり、身近なとこ  
ろに飾ったりして楽しんでほしい。それ  
が若い作家たちへの励ましになります」と  
石井さん。9月には近所の聖母幼稚園  
で「子どものためのアートスクール」と  
いう体験教室を開催した。これも若い作  
家や学生たちの活動の場を広げるための  
試みのひとつだという。

「アートって、人がふつと楽になったり、  
楽しくなったりするものなんですわねえ」  
というお客さんの言葉が印象的だった。  
アートが街を元気にしていく、街が若  
い才能ある人たちを応援していく、そんな  
あなたがたが風が吹き始めている。▼

横浜だから、黄金町だからできることを「映画館はこの地域の文化的財産であるし、本を読んだり学校に行くのとはまた

黄金町という街に魅せられて  
黄金町のシネマ・ジャック&ベティは1951年(昭和26)、東映名画座として出発した由緒ある映画館である。今斬新な企画が次々と飛び出し、年間120本を上映するこの館が2007年(平成19)春から3人の若者たちによって運営されているのをご存じだろうか。

「この街のにおいが好き」という3人は黄金町に魅せられて、3年ほど前にやってきた。その中に梶原俊幸さん(31歳)がいた。IT企業に勤めるかわら、風俗街が一扫され、閑散とした中から再生しようとしていた黄金町の新たな街作り活動にはまり込んだ。

「黄金町は人間味濃い下町。アジア系外国人の店やごちゃごちゃしたあやしげなものまじりあってるのが魅力」という。そういうところにこそ文化が根付くし、可能性があると考えた。この街で拠点をもちたいと思っていたところに、映画館を引き継がないかという話がきて決断し、自分たちの会社を作った。

横浜だから、黄金町だからできることを

「映画館はこの地域の文化的財産であるし、本を読んだり学校に行くのとはまた楽しみたい」と話す。

コミュニケーションの場を仕掛ける

梶原さんは電気屋を営む父と、家で絵

面教室を開く母の間で育った。母の実家は横浜・戸部にあった。自分も母の教室で10年ほど絵を描いていた。中学・高校時代はバンドで活動し、大学を出て吉祥寺のライブハウスで4年間働いた。

ジャック&ベティでは上映作品の映画監督や出演者のトークショーや音楽ライブを頻繁に行っている。映画+αの感動を感じてほしいと思う。そのため1階にはライブやさまざまなイベントのできる常設カフェも設けた。

ドキュメンタリー『ザ・ストリップ』では劇場を撮影舞台として提供し、ここで封切りとなった。また、市民グループと組んで障害を持つ子どもたちとともにイベントを行ったり、子どもたちを映写室ツアーに招いたり、枠にとらわれない企画にも意欲的だ。梶原さんたちの心意気に泉谷しげるが賛同し、今秋、ここで出演作品を上映し、コンサートを開く。

黄金町は今、横浜市の新しいアート拠点「黄金町バザール」が点々と開設され、人々がいきかう街になっている。「さまざまな動きと連携して、市民参加の企画をどんどんやりたい。街の人たちと一緒に、ここから新しい映像文化を発信していきたい。街をもっと深く、おもしろくしたい」と語ってくれた。

黄金町という街に魅せられて

違った学びの可能性がある。そう思っ

始めた。その頃、隣の横浜日劇が壊され放っておくとなくなるのだとショックを受けた。それで、どうしたら人が喜んで入ってくれるかを真剣に考えました。

昨年夏に戦争モノの上映があたり、お客のリクエストで中国映画祭を復活させた頃からリピーターが増えてきた。映画祭を開くと1日中映画館で過ごすファンも出てくる。苦心して考えた2本立てを「よかったよ」といって帰ってくるのをうれしかった。二度目の夏は『靖国』を神奈川で最初に上映した。これには相応の決意が必要だった。総勢25名の市民実行委員やボランティアとともに半年以上かけて準備した第一回横浜黄金町映画祭(2008年夏)も成功。それを担ったのは、シネマ・ジャック&ベティを残したいと願う市民たちだった。

「横浜は東京とは違う、地方都市ですだからこそ、ビジネス一辺倒でなくこんなミニシアターの実験ができると思う。横浜だからできること、それもみなとみらいではない黄金町だからできることを楽しみたい」と話す。



# 黄金町から発信する、市民参加の映画館を作りたい

かじわらしゆき  
1977(昭和52)年横浜生まれ。吉祥寺で育つ。慶応義塾大学卒業後、ライブハウス、学習塾、IT企業勤務をへて現在に至る。横浜市中区在住。

シネマ・ジャック&ベティ  
横浜市中区若葉町3の51 電話  
045-243-9800 http://www.  
jackandbetty.net/

Photo by Yabe Shiho

グッズで話題の「こそどろねこ」とは  
 キャラクター・グッズが人気を呼んで  
 久しい。半世紀以上にわたって愛され続  
 けている定番キャラクターも多い一方  
 で、「知る人ぞ知る」といった存在の新  
 進キャラクターも次々と登場する昨今で  
 ある。

そしてこのところ、若い世代を中心に、  
 じわじわと注目を浴びつつあるキャラク  
 ターがある。その名は「こそどろねこ」。  
 唐草模様の布を頬かぶりした、なんとモ  
 チャーミングでお茶目な猫のキャラク  
 ターである。

この「こそどろねこ」は目下、ぬい  
 ぐるみをはじめ、ポストカードやシー  
 ル、メモ帳、はんこ、携帯ストラップな  
 ど、さまざまなオリジナル・グッズが勢  
 揃い。グッズだけとは限らない。今年  
 の7月からは、テレビ局「キッズステ  
 ション」(衛星放送やケーブルテレビな  
 どで視聴可能)で「こそどろねこ」のプ  
 ロモーション用アニメの放送がスタート  
 し、注目度は高まるばかりである。

ぬいぐるみは子どもの頃からの夢だった  
 このデザインを手がけたのは、イラスト  
 レーターの山口なこさん(26歳)。生

まれ育った磯子に今も暮らす山口さんは、  
 美術を学んでいた母親の影響もあり、小  
 さい頃から絵を描くことが大好きだった。  
 「画家志望というわけじゃなくて、キャ  
 ラクター好きだったんです。で、自分が  
 描いたキャラクターをぬいぐるみ化する  
 ことが夢でした。だから、商品が出来上  
 った時は、本当にすごうれしかった。  
 ずっと夢見ていたことが、やっと実現で  
 きたわけですからね」。

そして、いちだんと山口さんを喜ばせ  
 たのは、雑貨屋に自らデザインしたぬい  
 ぐるみが並んでいるさまを見つけた時だ。  
 とりわけ、子どもの頃からよく通つて  
 いたショップで発見した際は、感激もひ  
 としおだった。

ほがらかな笑顔を浮かべながら、山口  
 さんはいう。  
 「うれしさのあまり、その場で母親に電  
 話したくらいですよ」。

高校生の時からウェブサイトで作品発表  
 今はデザイナー/イラストレーターと  
 して活躍する山口さんだが、作品の発表  
 をはじめたのは高校時代にさかのぼる。  
 ウェブサイトを開始し、自分の絵を数多  
 く掲載。次第にアクセスが増え、絵を見  
 た人々から「かわいいね」と感想を書

いたメールが届くようになった。  
 また、高校の担任にしてはどうかとアドバ  
 イスされたこともあった。

やがて、地元短大に進学。卒業を控  
 えて就職を考えるうち、山口さんは絵を  
 描く仕事につきたいと本格的に考えるよ  
 うになる。

その頃、たまたまぬいぐるみ製造会社  
 の求人が目にとまり、作品を持参して面  
 接を受けたところ、見事に採用。キャラ  
 クターを作るといふ憧れは、現実のもの  
 となった。

そして、現在の活躍ぶりはすでに触れ  
 たとおり。そんな山口さんは、普段、東  
 京にはめったに行かないという。  
 「遠出しても横浜駅前とか桜木町なん  
 ですよ。横浜は、東京ほど人が混み合っ  
 ている感じがいいですね」。

だが、「こそどろねこ」のためとなる  
 と、話は別。今年の11月には、東京で開  
 催されるアートイベント「デザインフェ  
 スタ」に参加。自らグッズを手売りする  
 予定だ。

「いろんな人に『こそどろねこ』を知っ  
 てほしい。そして、横浜から全国に向け  
 てキャラクターを発信していきたいんで  
 す。」



Photo by Yabe Shiho

# グッズやアニメを通して、 キャラクターで横浜から全国発信

やまぐちなこ  
 イラストレーター。1982年横浜市  
 生まれ。2006年3月に自ら創作し  
 たキャラクター「こそどろねこ」のオ  
 リジナル・グッズを発売。以来、次々  
 と新商品を送り出し、注目を集める。  
 今年の7月から、テレビ局「キッズス  
 テーション」で「こそどろねこ」のプ  
 ロモーション・アニメの放送開始。また、  
 雑誌やCD-ROMなどでイラストを  
 発表。「夏のねこグッズフェア」(プ  
 ランタン銀座)、「猫たちのアートグ  
 ズフェア」(高島屋堺東店)などに出品  
 するなど、各方面で活躍中。

馬車道という駅を  
電車が通り過ぎるたびに、  
その道を行き来した  
馬車の幻を見る。

文明開化の昔、  
馬車に乗っていたのは、  
海の向こうからやって来た  
人々だろうか。

その頃の、若い横浜の、  
まだ若かった秋の風は、  
ひそやかに年を重ねて、  
今の横浜を  
吹きすぎているかもしれない。

みずはら しおん

歌人。1959年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院修了。春日井建に師事し、以降歌集『びあんか』『客人(まらうど)』『くわんおん(観音)』『いろせ』『あかるたへ』、著作『世阿弥の聲』『皇の肉体』『京都うた物語』などを発表。現代歌人協会賞受賞、駿河梅花文学賞受賞、河野愛子賞受賞など多数受賞。

やべ しほ

写真家。1974年生まれ。奈良県出身。同志社女子大学短期大学部日本語日本文学科卒業。96年ドイツに渡り、日本語教師となる。帰国後、平地勲に師事し、独立。渡辺貞夫らミュージシャンを多く撮影している。

馬車道という駅を  
電車が通り過ぎるたびに、  
その道を行き来した  
馬車の幻を見る。

文明開化の昔、  
馬車に乗っていたのは、  
海の向こうからやって来た  
人々だろうか。

その頃の、若い横浜の、  
まだ若かった秋の風は、  
ひそやかに年を重ねて、  
今の横浜を  
吹きすぎているかもしれない。

馬車道に馬車のゆきにし秋の風  
いまだ若かりし風のがなしみ

写真 矢部志保  
水原紫苑



▲3階のお座敷の床の間には川合玉堂、鍋木清方、横山大観などの掛軸が。



▲2階の食堂は瓦を素材とした速水史郎氏の彫刻が空間を演出している。



▲橋本隆専務のあだ名は「ロクさん」。六代目だからだ。



▲うなぎのお値段は2310円。

創業明治5年。鰻ひとすじの一徹な老舗。

# 割烹蒲焼わかかな

名物のうなぎは特大級

関内駅下車徒歩1分にある割烹蒲焼「わかかな」の自慢は、うなぎだ。ご飯で茶碗二杯半（一合半）分が入るという大きな丼に、これまたわらじのように大きな焼きたての蒲焼がどーんと載って出てくる。炊きたてのご飯の湯気と一緒にうなぎの香ばしい匂いが嗅覚を通じてお腹を刺激する。

炊きたてのご飯は、その年その年の各地のこしひかりを精選してブレンドしたこだわりの逸品。うなぎは三河の一色産が中心。天然物ではないが生産者の名前も、いけすの番号も確かめて購入したもの。いいものがあれば全国どこへでも飛んでいき現場を確かめるが、今のところは一色産を採用しているそうだ。

食品の安全がかまびすしい時代にあつては、なんともたのしい姿勢だ。

頑固一徹な老舗の姿勢

割烹蒲焼「わかかな」の創業は1872年（明治5）。新橋・横浜間に鉄道が開業した年だった。136年前のことだ。そんな老舗にもかかわらず、「わかかな」には支店がない。それを持つ余裕があれば、すべてを今の店につぎこむ。利益が先にくる商売はしない。「うまいものを出す努力を真心こめて実行するだけ」という頑固一徹な老舗の姿勢が引き継がれているからだ。六代目の「ロクさん」こと橋本隆専務（36歳）の誇りは、まさにこの守り継いできた暖簾の経営姿勢だ。

料理は真心なくして完成せず

この世界には「串打ち三年、板八年、火鉢（焼き加減）一生」という教えがある。素材へのこだわりはもちろんのことだが、それ以上に「お客様に一番

おいしい状態でお出しする真心を持つこと」を降さんは五代目の橋本進社長からからだにたたき込まれてきた。

父親である社長の口癖は「技だけではだめ。おいしいものを食べさせたいという気持ちがないと蒲焼きに限らず料理は完成しない」。

で、その気持ちを養うべく、高校卒業と同時に店の寮にほうり込まれて四年ほど職人修行した。

「ちょうど若貴全盛期でね、親子の関係を断ち切って覚えるというわけです。社長も職人気質ですからね、言葉より手のほうが先に出る。先輩たちからもずいぶんかわいがられましたよ。社長に殴られて育ったお返しですかね（笑）」。

顧客管理は闇魔帳

「鰻屋でせかす野暮」という言葉がある。注文があつてから一つひとつ割いて焼くために時間がかかるという意味だ。ここ「わかかな」でも、うなぎを割いて、白焼きにし、45分ほど蒸し、タレをつけて焼くのに約1時間かかる。炊きたてのご飯を提供するのに約30分。あたたかいうちに出せば、丼に盛ったご飯とうなぎが一体化してうまみが浸

透する。だから、「丼もお出しする直前まで専用の温蔵庫で保存する」という徹底ぶりだ。この全工程を板前さん10人で分担する。「お客様はお腹が空いているわけですからできるだけ早く20分程度でお出しできるように、その日その時間帯のお客様を予測して、準備する」。

こんなところにも「おいしいものを食べていただきたい」という真心の配慮が見え隠れする。

顧客数の予測が可能なのは、「闇魔帳」、つまり統計データを保存しているからだ。それでも、混雑すると30〜40分ほど待たされるケースも出てくる。お客様が殺到する土用の丑の日ともなれば、なおさらだ。最大数で2000食になるとか。

ところで、うなぎの一番おいしい季節は「水が冷たくなる秋から冬」だそう。つまりこれから。ぜひ、ボリュームたっぷりうなぎに挑戦していただきたい。▼

有限会社和可奈  
<http://www.yokohama-wakana.com/>  
 〒231-10017 神奈川県横浜市中区港町5-120 TEL045-681-1404（代表）  
 営業時間 午前11時〜午後9時（年末年始と毎月第1から第4水曜日が定休日。祝日の場合は営業。7月と8月は不定休）。

# ハマの大人の社交場を みんなので受け継いで

クリフサイド代表取締役

のさかきんや  
1939年(昭和14)生まれ。緑ヶ丘高  
校をへて、学習院大学卒業。実業家。  
横浜市磯子区在住。

クリフサイド  
ナイトスポット&レストランとして  
営業中。月に2回、生演奏で踊るソシ  
アルダンス・ナイトと、ジャズ・ナイ  
トのイベントも行っている。ウエディ  
ング、同窓会などの貸切パーティをは  
じめ、コンサートやさまざまなイベ  
ントにも使える。  
〒231-0861 横浜市中区元町  
2-114 電話 045-641-1244  
[http://homepage2.nifty.com/  
cliffside/](http://homepage2.nifty.com/cliffside/)



## 昭和レトロをそのまま温存した空間

元町の代官坂は古き良き時代の横浜の  
雰囲気を残すストリートだ。知る人ぞ知  
るナイトスポット&レストラン「クリフ  
サイド」は、その代官坂を上り代官山ト  
ンネルを抜ける手前にある。

入口で出迎えてくれるのは黒いベスト  
に白シャツのウエイター、ウエイトレス  
導かれるままに中に入ると、吹き抜けの  
空間が出現し、ダンスが踊れる大きなフ  
ロアとステージが目飛び込む。1階ス  
テージの反対側には客席を見渡せるパ  
ー2階はショー全体を見下ろす回廊席と  
なっている。

創業は1946年(昭和21)8月。  
「山手舞踏場」としてスタートした。米  
兵相手のクラブが日本人立ち入り禁止  
だった当時、クリフサイドは生バンドで  
日本人がダンスを踊れる高級ダンスホー  
ルとして、東京からも人が詰めかけた  
という。

創業者はスカートの輸出業を営んでい  
た実業家の野坂政爾氏。終戦直後、物資  
のなかった当時、材木を買うために神奈  
川県知事に手紙を書いて建築許可を得た  
建物は今もそのまま。100平米のダン  
スフロアの床材は桧で、ハマジル(横浜

シルバ)を踊るのもってこいだという。  
時を経た空間には、新しいスペースに  
はかもし出すことのできない物語が色濃  
く漂っている。古いものがどどん壊さ  
れていく時代にあつて、奇跡のように存  
在する劇的な空間。日活映画「上海帰  
りのリル」(1952年=昭和27封切り)  
の撮影舞台となった当時の雰囲気がつ  
くりそのままアーカイブされていること  
に驚かされる。

## 粋なハマの遊び人たちの社交場

クリフサイドが建ったのは二代目社長  
の野坂欽也氏(69歳)が7歳の時だった。  
「この坂からね、港が見えたんですよ。  
ダンサーの女性が200人もいましたね。  
子どもだったのでかわいがられました。  
専用の「白バラ寮」に住んでいた女性も  
いてね。ダンスはもちろん、お茶やお花、  
英会話にマナーも教えて「クリフサイド  
大学」といわれたそうです」。

往時は一晩に4バンドも出演し、入  
れ替え制の入場を待つお客があふれて、  
「バンドマンが休憩に使う椅子も持って  
いかれてしまったほどだった」とか。ち  
なみに、ジャズ界の草分け南里文雄をは  
じめとしてたくさんプロを排出した。  
今も、クリフサイドに出演し、司会もこ

なす泰地虔郎さんは、1962年(昭和  
37)からここでサククスを吹いてきた  
ジャズマンだ。

## 今に受け継ぐハマの財産

今も、週末の夜はゴージャスな大人の  
空間を演出している。

月の前半に定期的に実施されるイベン  
トは、ビッグバンドの演奏をバックにソ  
シアルダンスが楽しめる「ドリーム・ダ  
ンシング」。後半は「ジャズ・ナイト」。  
現在のお客さんには、当時値段も敷居  
も高くて足を踏み入れられなかったと  
話す人も少なくない。だから、「そうい  
う人たちにもぜひ楽しんでもらえたら」  
と、イベントの入場料も2000円から  
3000円とリーズナブルな価格に設定  
している。

「長年、社会に貢献してきた熟年世代  
の人たちが楽しめるような場所にした  
い」という思いがあるからだ。

「父親の残したクリフサイドは横浜の財  
産です。幸い2人の兄も応援してくれま  
すし、みなさんも「残して」といつてく  
れる。だから、どうしてもここを守って  
いきたい。それには横浜の大人の社交場  
として、もっと使ってほしいですね」と  
しめくくられた。▼

# 聴く人たちにあたたかく支えられ、 横浜を拠点に音楽活動を展開

## Junkoさん

Capockボーカリスト



### Junko

ポップロックバンド「Capock」ボーカリスト。東京都生まれ。2003年1月、バンドを結成。06年、FMヨコハマ「YOKOHAMA MUSIC AWARD」でマンスリーチャンプに輝く。これまで発表したCDに「Pop Smile」「素敵なストーリー」など、また11月16日にはコンピレーションCD「大関東ギターエロス」が発売される。

衣装協力：Jean et Jeanne  
電話：045-624-0510 ワンピース  
¥89,250(DRIES VAN NOTEN)  
/マフラー ¥29,400(DRIES VAN NOTEN)  
/ヘアバンド ¥13,650 (the girl and the gorilla)  
撮影協力：本牧「Aloha Cafe」電話：045-261-6708

### ボーカリストにして信金職員の正体は

今年の夏にtvkでオンエアされた横浜信用金庫のCMは、記憶に新しい人も多いはず。オフタイムにポップバンドのボーカリストとしてステージに立つ女性が、場面が転換すると、横浜信用金庫の制服姿に変身し、本店の窓口でお客様に笑顔で声をかけている……といったストーリーだ。

このボーカリストにして信金職員を演じたのは、ポップロックバンドCapock(カポック)のメンバー、Junkoさん。実はれっきとしたボーカリストであり、ライブで歌うシーンがさまになっていたのは当然のことなのだ。

Junkoさんは2003年(平成15)に、同じ大学のサークル仲間、おさわ(ギター)、優季(ベース)、Yoko(ドラム)とCapockを結成した。当初は渋谷を拠点に音楽活動に取り組んだが、2006年(平成18)に転機が訪れる。インディーズ系アーティストの発掘を目的とするFMヨコハマの番組「YOKOHAMA MUSIC AWARD」に応募したところ、見事にマンスリーチャンプを受賞。これを機に、横浜でのイベント出演が相次ぐようになった。

### 路上演奏で感じる、東京と横浜の温度差

その後、Capockは週に一度、横浜駅前の路上で演奏活動を開始する。かつては渋谷でも路上演奏をしていたが、東京と横浜の間に温度差を感じたとJunkoさんはいう。

「横浜のほうが、聴いてくれる人たちがとてもあたたかい。通りすがりの人が、音楽を聴くつもりで立ち止まってくれて、東京では、たいいていの人達が遠巻きに眺めるだけなのに。その点、横浜の人たちは目の前に寄ってきて、距離感も本当に近いんですよ。」

また、路上演奏に限らず、ライブハウスやイベントでも、「横浜の音楽ファンはあたたかい」とJunkoさん。

「複数のバンドが出演するライブの場合、東京では目当ての演奏が終わったら、すぐに帰ってしまう人もいたりします。でも、横浜の人たちはきちんと音楽に向き合ってくれます。」

そうするうちに、女性2人、男性2人のメンバー全員一致で、拠点を東京から横浜に移すことを決意した。横浜出身者は一人もいないにもかかわらず。

それ以来、ツアーで東京や名古屋、大阪を訪れると「私たちは横浜からやって

きたCapockです」と自己紹介するようになり、横浜への愛着も増した。

### 初めてのワンマンライブに示す意欲

そして2年ほど、東京と横浜を行き来しながら活動を続けた。

だが、ついにこの秋から、やはり全員で横浜に移住した。

「暮らしてみないとわからない空気感がありますからね。横浜の魅力は、開けているけど都会的すぎないところ。それなのに、きれいでおしゃれ。いろいろな要素が溶け合った不思議な面もありますね。」

最近では、Capockのリスナーは広がりつつある。「恋愛ポップ」を掲げ、やわらかな歌声とさわやかなサウンドは横浜の人たちの心をとらえた。

「演奏が終わると、話しかけてくれる人たちも増えてきました。少しずつですが反応を実感しています。小さな階段をこつこつと上っている感じですね。」

来年1月には、初めてのワンマンライブを新横浜のライブハウス「ベルズ」で実施する。

「横浜で出会った人たちがどんなに支えてくれたのか、はつきりと見えるライブになりそう。ぜひ成功させたい。」



外苑・旧燈明寺本堂前で、「七夕」コンサートを開催しました。司会はラジオDJ植松哲平さん。出演者は織姫役に女性ボーカルのI.Rabbit、彦星役に男性四人組のCHURU、CHURUです。七夕にちなみ浴...



横浜信用金庫では、横浜のマーケティングを实践する「横浜ジェリービーンズ倶楽部」事業を展開しています。同倶楽部は「横浜の価値を高める各種の活動」を行うことを主目的としており、横浜観光プロモーションフォーラムによる認定事業になっています。ここでは、最近実施された同事業についてご紹介します。

衣装で登場したメンバーの姿が三溪園の緑に映え、見た目にも楽しいコンサートになりました。梅雨の時期ながら晴天に恵まれ、暑いライブを多くの方に楽しんでいただきました。

《よこしん》CMを制作

《よこしん》CM「街に素敵なストーリー」を制作しました。横浜で活躍するポップロックバンドCapockのボーカルJunakoさんを起用し、横浜を舞台として、とある女性の何気ない日常を描いたイメージCMです。C...



Mはtvk「KICK OFF F・Marinos」で放映されました(放映期間：2008年7月〜9月)。 ジャンジャンヌ 本牧にあるインポート専門のブティックです。20頁のJunkoさん(Capock)の衣装をご提供いただきました。コーディネートはオーナーの高井優一さんです。個性的な品揃えの素敵なお店です。住所：横浜市中区小港3-175 TEL：045-1624-0510 《営業時間》11時〜20時 火曜定休

横浜ルネサンス No.12

2008年10月31日発行 発行 横浜信用金庫 〒231-8466 横浜市中区尾上町2-16-1 Tel:045-651-1451 (代) Fax:045-651-2303 http://www.yokoshin.co.jp 編集 横浜信用金庫総合企画部 <横浜ジェリービーンズ倶楽部> http://www.yokoshin.co.jp/jbeans.html E-mail:jbeans@yokoshin.co.jp 制作・デザイン PortSide Station Co., Ltd.

横浜信用金庫 Printed in Japan 本誌記事の無断転載・複写を禁じます 本誌に関するお問い合わせは、横浜信用金庫総合企画部:045-651-1451(代)まで

横浜観光プロモーションフォーラム

横浜の観光・コンベンションに携わる約180の企業・団体・市民事業所からなる組織で、横浜への来訪者を増やすことを目的として活動しています。「横浜ルネサンス」を発行する「横浜ジェリービーンズ倶楽部」事業は、同フォーラムの認定事業となっています。



How To Taste Musics In Yokohama.

横浜の聴き方

第5回

「ブルー・ライト・ヨコハマ」 いしだあゆみ

朝日新聞が2007年に実施したご当地ソング全国アンケートで、「ブルー・ライト・ヨコハマ」は「知床旅情」、「津軽海峡・冬景色」に次いで第3位に入ったという。この曲は全国レベルのご当地ソングなのである(地元の高校が甲子園に出場したような気がする)。もちろん、横浜のご当地ソングの代表的な存在である。

当金庫が2003年に実施した「根岸線・駅の歌」募集で、2位の「よこはま・たそがれ」の近い得票で1位に輝いた。横浜市が今年、開港150周年を記念して実施したご当地ソングのアンケートでも、2位の「赤い靴」に大差をつけて1位になったという。「根岸線・駅の歌」では「赤い靴」が3位で、横浜市のアンケートでは「よこはま・たそがれ」が3位に入っている。横浜というところの3曲が三強らしい。

三強でも断然1位に入るのが「ブルー・ライト・ヨコハマ」である。この強みはどこに由来するのだろうか。

以前この欄で『よこはま・たそがれ』は、「別に横浜ではなくて神戸でもかまわないという感じがする」と書いた。ご当地ソングとしての「必然性が歌詞に希薄」だと指摘したのだが、「ブルー・ライト・ヨコハマ」に「必然性」を与えているのは「ブルー」という言葉である。

横浜は港町、海という連想から青がイメージカラーとなっている。当金庫が「横浜のニツクネーム募集」で集計した横浜のイメージ・キーワード

の上位は、「港町」「青」「海」だった。タイトルに「ブルー」が入っていることが、この曲の大衆性を支えているのだろう。「駅の歌」の調査でも、20代から70代以上まで幅広い年齢層から票を集めた。

発売は1968年12月である。この年の1月には青江三奈の「伊勢佐木町ブルース」が、翌1969年4月には森進一の「港町ブルース」が発売された。この2曲ともに大ヒットとなり、青江三奈と森進一はそれぞれの年のレコード大賞歌唱賞を受けた(森は最優秀歌唱賞)。伊勢佐木町は中区の一商店街で、「伊勢佐木町ブルース」はピンポイントのご当地ソングである。

一方、「港町ブルース」は函館から鹿児島まで14の港町が登場するナショナルチェーンのご当地ソングである。しかし、森のヘビーな演歌に、都会的な横浜は乗らなかつたのだろう。この曲に横浜は登場しない(「そして神戸」も)。

いしだあゆみがノンビブラートで歌う「ブルー・ライト・ヨコハマ」が、演歌の中でもかなりダイナミックな歌唱の2曲に挟まれた形でヒットしたのがおもしろい。作曲はポップの天才・筒美京平、作詞は橋本淳の名コンビで、レコード大賞作曲賞を受賞した筒美にとつて出世作となった。ポップの本質が「軽味」にあることを象徴する曲である。「港町ブルース」が横浜の陰画(ネガ)とすれば、この曲は今後横浜の陽画(ポジ)として君臨していくだろう。(中島久)

ミュージシャンとパフォーマーの衝撃のコラボレーション。  
横浜赤レンガ倉庫がエンターテインメントスペースに!

# スリースターショー LIVE & PERFORMANCE

横浜信用金庫  
横浜ジェリービーンズ倶楽部主催  
横浜開港150周年記念1stイベント

ヨコハマ大道芸

ジェリービーンズコンサート in 赤レンガ倉庫

## LIVE

出演バンド【スリースターショー】

- ・N.U.
- ・CHURU-CHUW
- ・マイクロニケル

## PERFORMANCE

出演パフォーマー【ヨコハマ大道芸】

- ・KAZUHO
- ・un-pa
- 【ジャグリング】
- 【ローピング】



ジェリービーンズコンサート 【1号館3Fホール】  
in 赤レンガ倉庫

2009.1.3 **土** 開場16:30 開演17:00

前売 **¥2,000** 税込み・全席自由

チケット取り扱い ローションチケット(Lコード:72609)  
お問合せ: 新横浜ベルズ 045-476-5691  
収益金は一部運営費を除いて、横浜市に寄付いたします。